

## はじめに

「そんな企画、うまくいくのかねえ」

本書の原作となった読売中高生新聞の連載「部活の惑星」が始まる前、何度も聞いた言葉です。

悲観論が出た理由はいろいろあります。一番大きいのは「新聞らしくない企画だから」というものでしょうか。

普通、新聞に取り上げられる中高生と言えば、飛び抜けた才能があったり、何かの大会で優秀な成績を残したりした人、あるいはハンドを乗り越えるなどドラマチックなエピソードがある人がほとんどです。

誰もが経験する部活に取り組む普通の高校生を主役にする。それも、小説風の連載に——というアイデアに懐疑的な意見が出るのも当然でした。

まず挙げたのが、「普通に考えればネタが持たないだろ」という至極まっとう（に見える）意見。おまけに、新聞のスタイルとは大きく異なる小説風——ノンフィクションノベル

風というオシャレな言葉を使う記者もいました——の記事なんて、担当するデスクも記者もほとんど書いた経験がない。

うまくいく公算なんてありません。「ただ単にすごい部活や中高生を紹介するのではなく、等身大の一〇代を描きたい」という思いだけでスタートしたのがこの連載でした。

幸い、中高生の熱量は、そんな担当者の不安をあっという間に吹き飛ばしてくれました。連載のトップバッターとして登場してくれた大泉高校女子ラグビー部（群馬県）のみなきんが、私たちに、はっきりと道筋を示してくれたのです。

何を描くべきかを。

彼女たちの連載の最終回に、こんな下りがあります。誕生したばかりの女子ラグビー部が初めての対外試合に臨む場面です。

へ一〇月二六日朝。きょうは大泉高校女子ラグビー部にとって記念すべき初の公式戦。

真新しい青のユニホームに身を包んだアスカ（仮名）は、いつもより高めの位置でポニ

ーテールを結った。そういえば、チームで円陣を組むのって、初めてかもしれない。

普通の新聞なら、「アスカは仲間と円陣を組み、気合を入れた」とさりと書くところかもしれません。しかし、取材を担当した女性記者は実際に試合を見て、いつもと髪を結ぶ位置が違うと気づいたそうです。そして、その気持ちがおくよくわかった、とも。

円陣を組む場面も単なる説明ではなく、あえてアスカ目線で描きました。「初めて円陣を組んだ」という事実だけでも、ドラマチックではありますが、より読者のみなさんにアスカと自分を重ねてほしいと思ったからです。

何か大事なことに臨む前、みなさんは自分をどう奮い立たせるでしょうか。

ちよつときこちなく、初めて仲間と円陣を組んだとき、初めて仲間とハイタッチを交わしたとき、みなさんはどんな気持ちになったでしょうか。

アスカの本気は、私たち取材班に、忘れかけていた何かを思い起こさせてくれました。そして、その時、描くべきは「本気だからこそ生まれる気持ちと場面」だと気づかされたのです。

連載は読売中高生新聞の名物コーナーの一つにまで成長しました。

本書は、二〇一四年一月の読売中高生新聞創刊から五年以上続く「部活の惑星」シリーズの中から、文化系の部活を取り上げた連載に加筆・修正を加えたものです。

定番のあの部活から、初めて聞くユニークな部活までバラエティーに富んだ活動を紹介しています。が、共通しているのが、「一〇代の本気」です。

本気だから流せる涙がある。

本気だから悩むことがある。

本気だから知ることができる人の温かみがある。

読者のみなさんには、担当記者が現場で心震わされた一〇代の熱量を感じていただければ、幸いです。

近年、部活を巡る環境は大きく変わりつつあります。「ブラック部活」という言葉も生まれたほか、部活による教員の負担も社会問題となっています。高校スポーツの象徴的存在で

ある高校野球でも、投手の球数制限をはじめ、改革に向けた様々な議論が始まりました。

確かに時代に応じて部活も変わっていかねければなりません。ただ、中高生を取材し続けている現場から言わせてもらえば、その議論で大切にしてもらいたいのは、一〇代が思い切り情熱を注げる環境をどう作り上げていくか、という視点です。

繰り返しになりますが、本書に登場するのは、どこにでもいる普通の中高生。部活の熱いドラマはいまも全国各地で数え切れないぐらい生まれているのです。

最後に「部活の惑星」に登場していただいたすべての中高生みなさんに一言だけ感謝の言葉を。

部活や勉強で忙しい中、長時間にわたる取材に協力していただき、本当にありがとうございます。ありがとうございました。

みなさんの一生懸命が生み出す物語を、取材班の記者はいつもワクワクしながら記事にしています。自分がみなさんと同じ世代だった頃の姿を重ねつつ、時に笑顔で、時に涙し……。どの物語にも例外なく、ぐわんぐわんと心揺さぶられてきました。

でも、これって、言い換えれば、みなさんが中学や高校で過ごす時間は、それほど濃密だ

ってことなのかもしれません。

どうか、これからも今という瞬間を大切に。ステキな本気ありがとう!!

(本文に登場する人物は、一部を除き、仮名です)

I

---

頂点を目指せ！

富士高 百人一首部——和歌の高嶺に腕を振りつつ

(静岡県)

窓の外に広がる青空の真ん中に、雪化粧を施した富士山がそびえ立つ。

い草の香りと一二月の凜とした冷気が漂う練習場で、コノハとマミは極限まで神経を研ぎ澄ましていた。正座で向き合い、額を突き合わせるように、畳の上に並ぶかるたに視線を落とす。

ピンと張りつめた空気を、百人一首の自動読み上げ機の音声が破る。

へちは……

「ビシッツツ!!」

静寂からの爆発的な動——。ほぼ同時に動き出した二人だが、コノハの右手がわずかに早く札をはじき飛ばした。

一瞬の決着の余韻を際立たせるかのように、読み上げ機の朗々とした声が続く。

へ千早ぶる 神代もきかず 龍田川——

ここは、富士高校百人一首部。競技かるたの全国大会で一九七九年の第一回大会から一〇



連覇を成し遂げた古豪だ。大人気漫画『ちはやふる』に登場する強豪校のモデルともいわれる。

二年生のコノハとマミはその名門の看板を背負って立つダブルエースだ。

#### ◆ダブルエース運命の出会い

「なんてキレイなの……」

小四の夏、コノハは兄が通っていた富士高校の文化祭を訪れ、思わず息をのんだ。

百人一首部の模擬試合。色鮮やかなはかま姿のお姉さんが、あり得ないくらいスピードで札を奪いあう。その激しさと美しさときたら……。

これやってみたい!!

一目惚れひとめぼとはまさにこういうことなのだろう。コノハはすぐに百人一首の本を買ってもらい、暇さえあれば、かじりつくように読みあさった。

地元競技かるたの教室があることを知ると、すぐに入門を決めた。その頃にはすでに、百人一首をほとんど暗記していたから、「すごい小学四年生が現れた」と愛好家の間ではちよつとした話題にもなった。

もう一人のエース、マミが百人一首と出会ったのはその一年後、小五の冬だ。

「超気持ちいい!!」

手元にかかるたの札を積み重ね、マミはそれはそれはご満悦だった。学校の授業でやった百人一首のかるた。枚数を減らした遊び程度のものだっただけ、面白いように札が取れた。

友達より先に「バシーン」と札を払えたときの何とも言えない快感。それをまた味わいたくて、マミもコノハと同じかるた教室の門を叩いた。

とは言っても、二人の物語が交錯するのはもう少し先の話。

マミが入ったのは、初心者クラス。すでに上級者クラスにいたコノハは雲の上のような存在で、同学年とは言え、校区も違うし、教室で一緒になることもなかったのだ。それに中学に入ると、それぞれ学校の部活が忙しくなり、教室に顔を出す機会も減った。

近くて遠い場所にいた二人が初めて言葉を交わしたのは、二〇一七年の春。富士高校に入學してからのことだ。

いま振り返ると、その出会いは運命に導かれたものだったのかも、とコノハとマミは思う。

へ瀬をはやみ 岩にせかるる滝川の われても末に 逢はむとぞ思ふ

百人一首から言葉を借りるなら、それは、岩で二つに分かれた川の流れが再びまた一つに戻るように必然とでも言おうか。

#### ◆ライバルとの初試合

競技かるたの名門、富士高校百人一首部の練習は基本、部員同士の練習試合で進む。

マミとコノハも入部直後の高一の四月下旬、初めて札を挟んで向かいあった。

コノハ「ヨロシクね、イイダさん」

マミ「アオヤマさん、お手柔らかに……」

かるた教室に通っていた経験者として、期待を集めていた二人。初対戦はまわりからも注目されたし、試合前のあいさつも何だかよそよそしい。

小学生時代から上級クラスで腕を磨いていたコノハは新入部員で唯一、「初段」の段位を持つ腕前。この日の試合はハンデ戦で行われた。

競技かるたは百人一首が書かれた一〇〇枚のかるたのうち、二人でそれぞれ二五枚ずつ札を取って自陣に並べる。読み上げられた札のうち、自陣の札を取れば自陣から一枚減り、敵



陣の札を取れば、自陣の札を一枚敵陣に送ることが出来る。先に自陣の札をなくした方が勝ちなのだが、この日の戦いは、マミが相手陣の札を奪えば、自陣の札を二枚相手陣に送れるというもの。

「これなら勝てるんじゃない？」

そう思って臨んだ初陣は、あっさり終わった。相手陣の札を取るどころか、自陣の札までコノハにさらわれ、九枚差の圧倒的な敗北を喫したのだった。

かるたの勝敗を分ける一つの要素が、耳の良さだ。

例えば、同じ「あ」で始まる札でも、その後続く文字が違えば、「あ」の発音は微妙に異なる。それを聞き分けることができれば、相手よりも早く動き出せる、というわけだ。特に自分から距離がある相手陣の札を取るには耳の能力が問われる。

あとから知った話では、コノハはピアノを習っていた経験もあり、絶対音感の持ち主なんだとか。どうりで強いわけだ。

◆はじめての勝利の味

百人一首部では、誰と戦って何枚差で決着がついたのかを毎日、欠かさずノートに書き残す。マミの記録に基づき、「VSコノハ戦」を振り返ると――。

●五月二五日、初めてハンデなしで対戦。三枚差で負け。  
と、ここまではよかったけど、

●六月一九日、「三度目の正直」の三戦目。……一二枚差で敗北。  
完膚かんぶなきままでにたたきのめされ、意気消沈。

へ風をいたみ 岩うつ波の おのれのみ くだけて物を 思ふころかな

頑強な岩に打ちつけては砕け散る波のように、マミの心も叩きのめされたのだった。

「何とかして、コノハに勝つ方法はないものか」

コノハの強みは相手より一步先んじられる耳。これは天賦の才みたいなので、一朝一夕に追いつけるものではない。

全体練習が終わってからも毎日、練習場が閉まるギリギリまで居残り練習を続け、思いついたのが「払い」の特訓だ。

いかに最短距離で動き、トップスピードで札に触れるか。指の伸ばし方に、手首の振り方……。無駄をなくして、コンパクトに「ビシッ!!」と決める。

払いがうまい先輩をマネして、何度も何度も札を叩く。授業中の居眠りで札を取る夢を見て、机を叩いちちゃったのにはさすがに驚いたけど（笑）。

敗北と練習を繰り返して迎えた高一の夏。マミのノートについて歓喜の二文字が刻まれた。

○八月七日、コノハに三枚差で勝ち――。

ギリギリだけど勝ち。勝ち。

「まだ実力差はあるけど、コノハをライバルと置いていいのかな」。少し自信がたった。

対抗心を燃やしたのはコノハも同じ。

「同年年には絶対に負けたくなかったのに!!」

入部当初からは、想像もできなかったマミの急成長は、後にコノハをさらなる進化に導くことになる。好敵手の存在はいつだって、人を強くするのだ。

#### ◆勝てん。奥深き団体戦

百人一首部に入ってから半年たった高一の秋、マミとコノハに待ちに待った瞬間が訪れた。

「みなさんにはこれから、団体戦に挑戦してもらいます」

来たあああああつ!! ずっと憧れていた団体戦。高校かるたの花形と言えば、仲間と戦う団体戦なのだ。

一チームは五人。一列に並んでそれぞれが相手チームの選手と戦い、三勝したチームが勝ちとなる。基本は一对一の戦いだけど、五つの対戦すべてが同時進行で行われるので、仲間と支え合いながら戦い抜く。

例えば、富士高校の場合、相手陣の札を取ったら、「抜いたっ!!」と大きな声で仲間や対戦チームにアピール。ミスをした仲間がいれば、「焦らなくていいよ」と心を落ち着かせる。



孤独な個人戦では、相手に一度つかまれた流れを取り戻すのは簡単じゃないけど、団体戦では、仲間の声力が力になる。劣勢でも、かけ声で調子を取り戻して、一気に勢いづくなんてこともあるのだから面白い。

マミとコノハらの当面の目標は、一カ月後に迫った一年生同士による県新人戦での優勝。メンバー的には優勝候補筆頭であることは間違いなかったのだが、仲間と戦うかるたは、想像以上に奥が深かった。

まず知ったのが、団体戦特有の緊張感。今までは目の前の札に集中すればいいだけだったのに、仲間のプレーにも気を配らなくてはならない。二対二になって自分で勝敗が決まるときなんかは、チームメートの祈るような視線が心に突き刺さる。

そんなこんなで、団体戦の練習では悪戦苦闘。コノハは札位置の暗記がおろそかになり、マミにいたってはお手つきを



連発し、個人戦では勝っていた相手にも黒星を喫した。

新人戦は予選で各選手が個人戦三試合を戦い、成績優秀者の多いチームが、団体戦で決勝に進む特殊ルールで行われる。団体戦恐怖症に陥りかけていたマミとコノハも個人戦では順調に勝ち星を重ね、いよいよ決勝を迎えた。

大一番でダブルエースをよみがえらせたのは、やはりお互いの存在だ。

まず、お手つきを連発していたマミがみせる。

「抜いたああーっ!!」

もはや、なるようになれ。やけくそ気味に放ったど迫力のかげ声に会場がどよめく。初めて見るマミの隠れた「野性」に、みんな一瞬、あぜんとしたけど、コノハだけは違った。

「マミの声、気持ちいい!!」

負けじと札を払い、「抜いた!!」の連発。二人は競うように札をとり続けた。

へ嵐吹く 三室の山の もみぢ葉は 竜田の川の 錦なりけり

嵐で吹き飛ばされた紅葉がその後、川を美しく染めるように、試練を乗り越えた二人は県

新人戦優勝という秋の歓喜をチームにもたらしたのだった。

季節は巡り、高二の夏。マミとコノハに大きなチャンスが舞い込んだ。

「今年の県予選のメンバーを発表します」

顧問の稲垣先生が切り出す。全国大会につながる県予選の登録メンバーは八人。もちろん三年生が中心になるのだが、

「……コノハ！ ……そして最後にマミ！！」

まさかの大拔擢だいばつてきに、二人は「はいっ!!」と力強く返事をし、目を輝かせた。

#### ◆快進撃、そして未来へ

クーラーが効いたバスから降りると、照りつける日差しでじわりと汗がにじむ。二〇一八年七月、決戦の地を踏んだマミとコノハは、胸の高鳴りを抑えきれずにいた。

滋賀県大津市の近江神宮おうみ。百人一首の一番歌を詠んだ天智天皇てんじがまつられる「かるたの聖地」であり、高校日本一を決める「全国高等学校かるた選手権」の舞台にもなっている。

県予選を勝ち抜いた名門・富士高校が目指すのももちろん全国の頂点。二年生とはいえ、

二人に期待されるのは、勝利だ。

トーナメントで争う団体戦。富士高校は快進撃を見せた。

会場が沸いたのは三戦目。過去一一度の優勝を誇る男子校・暁星高校（東京）との対戦だ。こっちは歴代最多の優勝一二回とは言え、最近は分が悪い。日本一になるには、絶対に越えなければならぬ壁だ。

「いくぞおおおー!!」

さすが強豪。男子力。全開の野太い声は経験したことないど迫力。サブで応援席にいたママまで思わず気おされた。

コノハは接戦の末、敗れたものの、ここで鬼気迫る戦いを見せたのは、大会を最後に引退する三年の先輩たち。すさまじい気迫で格上相手に一步も譲らず、ねばり強く札を払い続けた。

三対二。息詰まる戦いを制した瞬間を、ママとコノハはきつと忘れない。放心状態で汗をぬぐう先輩、応援席で涙を流し喜びを爆発させるOB……。名門の看板を背負う重さを知った。

「私に行かせてください!!」

迎えた中津南高校（大分）との準々決勝。二人は出場を直訴した。先輩たちは激戦を終えたばかり。チームのために少しでも力になりたかった。

勢いに乗る富士高校は先輩たちがまず二連勝。マミとコノハラ残る三人のうち一人でも勝てば準決勝進出が決まる圧倒的優位に立ったが、ここからが全国の厳しさだった。

先に決着がついたのはマミの方。いま振り返ると、焦りがあったのかも。終盤の勝負所、読み手の声に瞬間的に体が動いたが、「しまった!!」と思った時には、札を払っていた。痛恨のお手つき。先輩も同時に敗戦が決まり、これで二対二。

最後の一人、コノハも苦しかった。この時点で自陣には七枚も札が残っており、相手陣はわずか二枚。普通なら諦めてもおかしくない場面なのだが……。

「まだまだここから。絶対に勝つ!!」と、怒濤の連取、連取で、あつという間に一枚差。マミも奇跡を信じ、必死に声を張り上げる。

「コノハ、いける!!」

小さく頷いたコノハは畳の上のかるたに視線を落とし、最後の気力を振り絞る。

「絶対、絶対、優勝する——」

大会を終えた帰りのバス。隣同士に座ったマミとコノハは車窓の景色をぼーっと眺めていた。

「もしも、あのとくに違う札が読まれていたら……」

「もしも、私じゃなくて先輩が試合に出てたら……」

へ逢ひ見ての　のちの心に　くらぶれば　昔はものを　思はざりけり

子ども心に抱いた憧れで、足を踏み入れたかるたの世界。初めて経験した大会は、その命を削るような戦いの厳しさと楽しさを教えてくれた。

次こそは、この舞台でチームを勝利に導く――。言葉交わさずとも、ダブルエースの思いは同じ。高嶺<sup>たかね</sup>を目指す本当の戦いが今、始まろうとしていた。

(二〇一九年一月一八日号～二月八日号掲載)